

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2014年度第1回公開セミナー報告

タイトル：(アフリカ入門) 人間と野生動物の共存をめぐるポリティクス～バッファローがマサイを殺すと、誰が何を言う？～

日時：2014年6月10日(火) 18時～20時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階セミナー室(301)

司会：深澤秀夫(AA研)

講演者：目黒紀夫(AA研)

コメンテーター：岡崎 彰(一橋大学)

参加者：31名

内容：

アフリカにおいて野生動物は重要な観光資源であるのと同時に、その保護がグローバルにさげばれ・取り組まれている対象でもある。野生動物を保護するアプローチは1980～90年代に大きく転換し、「コミュニティ主体」のアプローチが採用されるようになっている。その一方で、現在では、アフリカの一地域で起きた出来事であっても、さまざまなメディアをつうじて素早く情報が広まっていくようになっている。そこにおいて、現場がどのように伝えられるのかは、それを伝えようとする人や組織の考えや立場によって大きく左右されているのが現実である。今回の講演では、野生のバッファローが地域の青年を殺したことをきっかけとして、何百人もの住民が参加した報復としての狩猟を実行したり、地域内外の政治家とともに政府と対話・交渉が行われたりしたプロセスと、一連の事態の推移をめぐって、どのような主体がどのような枠組みで問題をとらえて行動や発言をしているのかを整理した。そして、野生動物保全にかかわる権益をもとめてさまざまな主体がその現場に介入しようとするなかでは、「コミュニティ主体」といいつつも、野生動物の害や危険性に直面しながら実際に同じ土地のうえで共存している住民の声がかき消されていることが指摘された。質疑応答では、今日の野生動物保全の政策が植民地支配の遺産としての側面を強く持っている点や、さまざまな利害関係者のあいだでフィールドワークを行う研究者の立ち位置をめぐって議論が交わされた。

※当報告の内容は著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.